

秋期福音特別集会 (3) (京都)

活現者たる「エホバの僕」

——イザヤ書第54章～55章——

1982年11月28日

小池辰雄

愛の綱 霊の子らをつくる 全世界の神 やけくそ信仰 体受即体現 動中の工夫 終末的な
恵福 靈魂をたのしめる 即在即所 根元現実では成っている 実言だから実現 祈り

【イザヤ54】

1 なんじ孕まず子^{はら}をうまざるものよ、歌うたうべし。産みのくるしみなきものよ、声をはなちて謳^{うた}いよばわれ。夫^{おつと}なきものの子とはとつげるものの子よりおとし。此はエホバの聖言なり。2 汝が幕屋のうちを広くし、なんじが住居^{すまい}のまくをはりひろげて吝^{おし}むなかれ。汝の綱をながくし、なんじの杙^{くい}をかくせよ。3 そはなんじが右に左にひろがり、なんじの裔^{すえ}はもろもろの国をえ、荒廃^{あれすた}れたる邑^{まち}をもすむべき所となさしむべし。

4 懼^{おそ}るるなかなんじ恥ることなからん。惶^{あわ}てふためくことなかれ、汝はじしめらることなからん。若きときの恥をわすれ、寡婦^{やもめ}たりしときの恥辱^{はづかしめ}をふたたび覚ゆることなからん。5 なんじを造り給える者はなんじの夫^{おつと}なり。その名は万軍のエホバ、なんじを贖^あい給うものはイスラエルの聖者なり。全世界の神となえられ給うべし。6 エホバ汝をまねきたもう。棄てられて心うれうる妻また若きとき嫁ぎてさられたる妻をまねくがごとしと。此はなんじの神のことばなり。7 我しばし汝をすてたれど大いなる憐憫^{あわれみ}をもて汝をあつめん。8 わが忿恚^{いきどおり}あふれて暫くわが面^{かお}をなんじに隠したれど、永遠のめぐみをもて汝をあわれまんと。此はなんじをあがない給うエホバの聖言なり。

9 このこと我にはノアの洪水のときのごとし。我むかしノアの洪水をふたび地にあふれ流ることなからしめんと誓いしが、そのごとく我ふたび汝をいきどおらず、再びなんじを責めじとちかいたり。10 山はうつり岡はうごくとも、わが仁慈^{いづつくしみ}はなんじよりうつらず、平安をあたうるわが契約はうごくことなからんと。此はなんじを憐れみたもうエホバのみことばなり。

11 なんじ苦しみをうけ暴風^{はやち}にひるがえされ安慰^{なぐさめ}をえざるものよ、我うるわしき彩色^{いろどり}をなしてなんじの石をすえ、青き玉をもてなんじの基をおき、12 くれなゐの玉をもてなんじの櫓^{やぐら}をつくり、むさらきの玉をもてなんじの門をつ



くり、なんじの境内^{さかいのうち}はあまねく宝石にてつくるべし。13 又なんじの子輩^{こら}はみなエホバに教えをうけ、なんじの子輩^{こら}のやすきは大いならん。14 なんじ義をもて堅くたち、虐待^{しえたげ}よりとおざかりて憎^{おそ}ることなく、また恐懼^{おそれ}よりとおざかるべし。そは恐懼なんじに近づくことなければなり。15 縦^{たと}いかれら群れ集うとも我によるにあらず、凡てむれつどいて汝をせむる者はなんじの故にたおるべし。16 みよ炭火をふきおこして用いべき器をいだす鉄工^{かなだくみ}はわが創造するところ、又あらし滅ぼす者もわが創造するところなり。17 すべてなんじを攻めんとてつくられしうつわものは利あることなし。興起^{おこりた}ちてなんじとあらそい訴うる舌はなんじに罪せらるべし。これエホバの僕等のうくる産業なり。是かれらが我よりうくる義なりとエホバのたまえり。

【イザヤ55】

1 噫なんじら渴ける者ごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。2 なにゆえ糧にもあらぬ者のために金をいだし、飽くことを得ざるものために労するや。われに聴き従え、さらばなんじら美物^{よきもの}をくらうをえ脂^{あぶら}をもてその靈魂^{たましひ}をたのしみまするを得ん。3 耳をかたづけ我にきたりてきけ、汝等のたましひは活くべし。われ亦なんじらととしえの契約をなしてダビデに約せし変らざる恵みをあたえん。4 視よわれ彼をたててもろもろの民の証とし又もろもろの民の君となし命令する者となせり。5 なんじは知らざる国民^{くにびし}をまねかん。汝をしらざる国民はなんじのもとに走りきたらん。此はなんじの神エホバ、イスラエルの聖者のゆえによりてなり。エホバなんじを尊くしたまえり。6 なんじら遇うことをうる間にエホバを尋ねよ。近くいたもう間によびもとめよ。7 悪しきものはその途^{みち}をすて、よこしまなる人はその思念^{おもひ}をすててエホバに反れ^{かえ}。さらば憐憫^{あわれみ}をほどこしたまわん。我等の神にかえれ豊かに赦しをあたえ給わん。8 エホバ宣^{のたまわ}給く、わが思ひはなんじらの思いとなり、わが道はなんじらの道よりも高く、わが思ひはなんじらの思いよりもたかし。10 天より雨くだり雪おちて復かえらず、地をうるおして物をはえしめ、萌^めをいだししめて播^まくものに種をあたえ、食うものに糧をあたう。11 如此^{かく}わが口遣りし事をはたさん。12 なんじらは喜びて出できたり平穩^{おだやか}にみちびかれゆくべし。山と岡とは声をはなちて前^{みまえ}にうたい、野にある樹はみな手をうたん。13 松樹^{まつ}はいばらにかわりてはえ、岡拈樹^{もちのき}は棘^{おどろ}にかわりてはゆべし。此はエホバの頌美^{ほまれ}となり並^{また}とこしえの徴となりて絶^{たゆ}ることなからん。



●愛の綱

イザヤ書54章から入ります。

「なんじ^{はら}孕まず子をうまざるものよ、歌うたうべし。産みのくるしみなきものよ、声をはなちて謳^{うた}いよばわれ。」

神エホバとイスラエルとの関係を夫と妻との関係において言っている。非常に親しい間柄です。主と僕、夫と妻、牧者と羊、というようにいろいろな生活の上からくる譬えで言っているわけです。イスラエルの女の人は、子供が生まれることが祝福であるという。新約にも、「女は子が生まれることで救われる」とあります。

「生まずめみたいなお前たちだけでも、いいんだ。だから、歌をうたえ」というような気持でここは言っているわけです。

夫なきものの子はとつげるものの子よりおおしと。此はエホバの聖言なり。

これも常識では考えられないようなことを言っている。預言者は、肉的な親子の関係ではなく、霊的な関係における親子を、

「霊的な子々孫々がアブラハムの子孫にできる」

と言っている。そういうわけだから、

2 汝が幕屋のうちを広くし、なんじが住居^{すまい}のまくをはりひろげて吝^{おし}むなかれ。汝の綱をながくし、なんじの牀^くをかたくせよ。

具体的にイスラエルの民の生活をもつて語っている。

幕屋の一番簡単な姿は三角垂体です。まん中に十字架の大黒柱がある。我々においては一番少ない複数は3人のa、b、cです。

「二、三人わが名の中へと集まるところに私はいる」

というキリストの言葉は幕屋の一番本質的な構造を仰っている。幕屋の中は聖霊(プニユーマ)(p)です。

キリストは私たちと同じ平面のどん底に立っておられる。こういう構造が非常に象徴的に表すわけです。破れ幕屋で、いろいろ穴が開いてたり、穴を通して星の光が見えたりする。

「その幕屋を広くしておおいに誰でも入れてやれ」

という。それをたたんではまた旅をして、また張っては行くという動的なすがたです。使徒行伝18章に、

「神のうちに生き動きまた在るなり」

という、パウロの言葉もある。

「綱」というと、ホセア書の中に「愛の綱」という言葉がある。ホセアは神さまとイスラエルの関係を夫と妻の関係で非常に深刻に語っている預言者です。11章1節、

「イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ。我わが子をエジプトより呼びい



だしたり。

「幼かりしとき」とは、歴史の始めの時ということで、即ちエジプトで半奴隷状態にいた時です。

かれらは呼ばるるに随^{したが}いていよいよその呼ぶ者に遠ざかり且もろもろのバアルに犠牲をささげ彫りたる偶像に香を焚^たけり。

そんな考えられないことをすぐやる。

われエフライムに歩むことをおしえ、彼等をわが腕^{かひな}にのせて抱けり。然どかれらは我にいやされたるを知らず。われ人にもちいる索^{つな}すなわち愛のつなをもて彼等をひけり。」(ホセア11・1～4)

この「愛のつな」という言葉が非常に印象的です。キリストは見えざる愛の綱で私たちを引いていくのださる。

幕屋の綱は愛の綱で、幕屋の中は御霊の空間、柱は十字架というわけです。大事なものは十字架(スタウロス)(s)と聖霊(p)です。だから、sp分のa、sp分のb、sp分のcというように、公分母をもっているわけです。十字架・聖霊を公分母にしている。だから、このa、b、cはspという共通なものを持っている。これが我々の集会(エクレシア、召団、幕屋)です。同じspという分母をもっている。

●霊の子らをつくる

我々は互いに霊的な兄弟姉妹です。この地上が既に天国です。我々は地上を天界として歩いている天国人^{てんこくにん}なんです。

「神の国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われたのはそのことです。天国は私たちの中にあるし、お互いの間にある。コイノニアはただ社交的な交わりではない。

このイザヤ54章2節は、

「幕屋のうちを大いに広めよ」

とはもちろん具体的な表現をもつて霊的な現実を語っているわけです。いわゆる子供がいようがいまいが、そんなことは問題ではない。肉の子であろうと何であろうと、それを本当の霊の子に育てなかつたらどうにもならん。

肉の母であろうと、霊の母であろうと、母というのは大事なものです。女性が歴史をつくる。

陰のわざをしている。

「見えざるに見たもう神」

というが、神さまは女性の方をよく、見えざるに見てありたもう。というのは、女性は隠れたような存在だから。ところが、それが歴史を担っている。「母なる大地」という言葉もある。どういう社会の人であろうと、一流の魂のいい人のお母さんというのは例外なしに



魂がいい。だから、母は、女性には歴史をつくるという。日本の女子教育は本当に大事なんだ。この頃の日本の教育は、点数がなんのかんのと、全くしょうがない。もつとたくさん、いろいろな専門学校や特殊学校をつくつたらしい。その人が好きなことや、自分はこの点でもって自分の才能があるという、それを伸ばしてくれる学校がなくてはいけない。ところがみな大体、一律になってみたりする。大学でも、各大学がそれぞれ特色をもつてやっていけばいい。共通一次試験なんていう下らないことをやっている。そんなものは要りはない。各大学は、私の所はこれでいくんだといって、やっていけばいい。ドイツではそういう調子でやっている。なにもベルリンなんか集中しやしない。あそこの大学のあの教授はこれでもって世界的なんだという、学生はその講義を聞こうと思つたら、そこへみな行くわけだ。各大学に学生が共通に行ける。どこへ行つたつて構わない。一学期はここで、また二学期はあちらの大学で別の先生の講義を聞きに行く。文科も理科もありはない。自分の聞きたい講義を聞きに行く。向こうの構造は非常にオルガーニッシュに、有機体的にできている。

「ジステーム」(組織)はダメなんだ。「オルガン」(有機体)というのは、人間の身体がオルガンです。これはパウロが、

「全身が目だつたらどうなるか」

と言っているとおりで。いろいろな働きを持ったいろいろな部分が渾然として一つの生命になっているところに、大事な有機体的構造というのがある。いわゆる全体主義ではない。また、いわゆる個人主義でもない。

私たちのたまわった福音は大事なんだから、これは絶対に、皆さん一人ひとりが伝道者の自覚をもってください。

「綱を長くし、幕を広げろ」

というのは、大いにそのようにして「霊の子らをつくつてくれ」ということです。

●全世界の神

3 そはなんじが右に左にひろがり、なんじの裔^{すえ}はもろもろの国をえ、^{あれすた}荒廃^{あれすた}れたる邑^{まち}をもすむべき所となさしむべし。

4 懼^{おそ}るるなかなんじ恥ることなからん。^{あわ}惶^{あわ}てふためくことなかれ、汝はじしめらるることなからん。若きときの

即ち、エジプトにいた時の、

恥をわすれ、^{やもめ}寡婦^{やもめ}たりしときの恥辱^{はづかしめ}をふたたび覚ゆることなからん(覚ゆることなかれ)。

これはエジプトとバビロンの二つの場合のことが言われているわけです。出エジプトと出バビロニアです。艱難の中にあったエジプト時代と、また罰に服して服役であったところ



のバビロニアの捕囚時代。これはイスラエルの二つの歴史です。艱難とその罰から解放されたのをエジプトと出バビロニアという。イスラエルの民というのは大事なことを歴史的に自分で学んでいるわけです。

最後にキリストが現れて、大きなひっくり返しをしようとしたところが、結局、イスラエル人は相変わらず旧約聖書にこびりついて、十字架を通しての大きなひっくり返しに來ない。

「律法と預言者を全うするために私は來た」

とキリストが言ったのに。

「ああイスラエルよ、私は歴史の終りまで待っているんだ」

という、キリストの悲痛な悲願です。ユダヤ人はなかなか頑くかな民なんだ。

5 なんじを造り給える者はなんじの夫なり。その名は万軍のエホバ、なんじを贖い給うものはイスラエルの聖者なり。全世界の神となえられ給うべし。

「贖い主、創造者、万軍のエホバ、全世界の神」

と第二イザヤでは畳みかけて素晴らしい言葉がでてる。ここに「全世界の神」という素晴らしいはつきりした言葉ができた。神さまは全世界の神であつて、民族に現れたが、いわゆる民族神ではない。本質的には既に始めから全世界の神なんだけれども、啓示には段階がありますから。

6 エホバ汝をまねきたもう。棄てられて心うれうる妻また若きとき嫁ぎてさ
られたる妻をまねくがごとしと。此はなんじの神のことばなり（棄てられたる
心憂る妻のごとく、無視せられし若きときの妻のごとく、エホバ汝を招きたもうが
故なり、と汝の神言いたもう）。

これはエジプト時代とバビロニア時代の両方をひっくりくるめて言っている。だから、第二イザヤは非常に深い慰めの音信で、そして大きな希望の音信が最後にやってくる。

7 我しばし汝をすてたれど大いなる憐憫^{あわれみ}をもて汝をあつめん。8 わが忿恚^{いきどおり}あ
ふれて暫くわが面^{かお}をなんじに隠したれど、永遠のめぐみをもて汝をあわれま
んと。此はなんじをあがない給うエホバの聖言なり。

7、8節は同じことを別な言葉で言っている。ここは非常に大事なところですよ。神の怒りはしばし怒って棄てた。けれども、深い憐れみを持っている。神の怒りは義の表れです——義はそればかりではないけれども——そして審判なんです。けれども、それは「しばし、暫く」です。憐れみの方は「永遠のめぐみ」です。「大なる憐憫」と「永遠のめぐみ」、「汝をすてた」と「わが面をなんじに隠した」が対句になっている。棄てられた、顧みられなくなった、見えなくなった。神さまは、棄てたり、怒ったり、隠れたりしても、もうひとつ奥ではちゃんと顧みている。決して棄てない、決して隠れない。現れる。



●やけくそ信仰

神さまの仕打ちはいろいろなんだ。いろいろな仕打ちを神さまは我々になさる。

「^{わざわい}禍害までくだす」

と書いてある。けれども、現象は千変万化であるが、愛は不変である。どんなことがあつても、神の愛は変わらない。現象面ではまるで、棄てたり怒ったり、蹴飛ばしたり——白隠を鍛えた正受老人がそうだった——それでも、それは本当に愛するが故の筈である。

私はいわゆる立派な先生でも立派な牧師でもありません。けれども、

「小池先生が捕まえられているものは本ものだから、先生にどんなに取り扱われて

も、私はついていくぞ」

という人は、私は今度は本当に担いでやる。本当に担いで進んでいく。お互いに倒れたら、先生は門弟を、門弟は先生を担っていくような、そういう間柄でなければダメです。それが本当の信であり、本当の義であり、本当の愛である。

「こう言つた、ああ言つた」

なんて、お互いにうわきなんかしていたらダメですよ、お互いがダメになります。私は、イザヤがこういうことを書いてくれたから、本当にありがたい。

「神さまがいるのに、一体なぜこんな不公平なことがあるのか。何故、私はこんな

運命にあるのか」

なんて、大体そんなことで神さまを判断して、信仰を止めてしまつたり、信仰に入らなかつたりする人がずいぶんいる。人間の判断で分かるような神さまは、神さまではありません。人間の判断を越えて、

「もう、分かん」

ということ。だから、藤井先生が、

「私の信仰はやけくそ信仰というんだ」

と言つた。私は先生のあの言葉が忘れられない。やけくそ信仰というのは、

「神さまにどうされても絶対についていくんだ」

ということ。運命がどうなつたつて、自分の尺度で神を計つて、そんなことで神さまを判断したら申し訳ない。

「神さまの中には大いなる故^{ゆえ}あり」

という。「この故に」という神さまが言うところの「故^{ゆえ}」というものは、我々の判断をこえた故なんです。「何ゆえか」と言つても、神さまの故は分からない。神さまの「この故に^{ゆえ}」というのは、何が「この故に」か我々には分からない。

そういう、我々の判断を越えたところの、端倪^{たんげい}すべからざるところの神さまを本当に信じぬき愛しぬいて、自分を本当に投げ出して生きていたのが、ナザレのイエスというひとである。十字架は、イエスも分からん。もちろん旧約聖書で読んで知つていらつしやるけ



れども。

「もう止^よしてください、この酒杯^{さかずき}ばかりは」

と、ゲッセマネで血の汗を滴らせるがごとく祈ったとルカ伝に書いてある。イエスは本当にそのようなにして、人間イエスとして苦しみました。

「しかし、私の意^{こころ}ではありません」

と。あの「しかし」でもってキリストはグーツと本当のところ——それは始めから分かっているらしいしやるけれども、しかし頭ではないですから、それをぶちまけて——いよいよ十字架にかかるわけです。「われなり」と言ったら、ローマの兵隊がぶつ倒れたではないですか。

「一切が不合理なるがゆえに、矛盾なるが故に、この世は非常に不公平なるが故に、

神を信ずる」

というところに本当の信仰がある。

「それが地獄だか極楽だか知らん。けれども、私は信ぜざるを得ない」

と言ったのが親鸞ではないですか。親鸞の『歎異抄』は本当に凄い。これはその深みにおいてはルターの『キリスト者の自由』より以上だ。我々の先輩には本当に凄い先輩がいたから、そういう意味においては、仏道の第一流のものはおもしろいから読んでごらん下さい。54章の7節、8節は旧約でも一番深い句の一つです。53章で極みの深い贖いの消息を言ったかとおもうと、54章、55章になると、グーツと動的にそのエホバの僕が働くところの世界です。ここは甦りの復活のキリストの世界です。

●体受即体現

今日の主題は「活現者たるエホバの僕」という。「預言者・贖罪者・活現者」なるエホバの僕がトリオ（三相）になっている。神の霊でもって活現自在なエホバの僕ということだ。これがマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書に出ているところのキリスト、活現者たるエホバの僕です。神の子、神の僕ということ。僕は使命的存在、子は本質的存在です。これは大変なひとだ。

イエス・キリストを私たちは全存在で体受します。イエスを身体で受けとります。そうすると、キリストという無限無量の霊的存在が今度は体現してくる。体受すれば体現せざるを得ないという消息が、我々がイエス・キリストを受けとった消息になる。今までのマルチン・ルターの宗教改革では、

「信仰によって義とされる」

というところでお終いだ、お終いと言いつ切るのは悪いけれども。ルターは、

「信仰と行為を二段構えにして、行為、行為と言っているからダメだ」

と言った。彼は、



「信仰のみによって」

と言って、ガラテヤ書のあの言葉に「のみ」をつけた。

「この信仰が本ものならば、行いは、してるかしないかを考えない先に既に行っている」

と言った。そこはさすがはルターです。ルターにとつては、気持は信行一如になっているけれども、「信仰のみ」をあまり強調しすぎた。歴史的には彼はそれを言わざるを得なかったから、それはそれでいい。ところが、我々は、イエス即キリスト、無即無限無量なんだ。そうすると体受即体現となるから、御霊の世界では、もし動的に動いているような在り方でなかったなら、それは本当に御霊を受けているとは言えなくなる。「信仰のみ」なんていう言い方は、我々はもう止めになつてしまふ。

「もう私は救われました」

なんていつて、いい気になつていたら、そんなものはひとつも信仰でも何でも無い。ここが新宗教改革の大事な生命の動的なところで、これは強調せざるを得ない。パウロがキリストに捕まったら、あの大きな艱難を突破した。コリント後書11章のあれだけの艱難を突破できたのは、絶対に聖霊の力です。そのパウロが

「信仰のみだ」

と言っている。けれども、パウロに於ては本当に信行一如です。ルターはもちろんそのパウロの線にそつて言つただけけれども、プロテスタントがどうも觀念にずれてしまった。歴史が進むと必ず段々ずれていく。またそれを元に戻さなければいかん。

だから、

「クリスチャンの生涯は全生涯が悔い改めである」

という、あの「悔い改め」というルターの言葉を私は、

「立ち帰り」

と訳し変える。なぜ、ルターは「懺悔をせよ」なんていう言い方をしたかと思う。

「転回してキリストのところへ帰れ」

と、なぜルターは訳さなかったかと思う。歴史もそうなんです。我々の生涯でも、常に絶えず新たに帰つて進んでいく。

●動中の工夫

禅宗の第六祖が言つた言葉の中に、

「見聞転誦是小乗」

悟法解義是中乘

依法修行是大乘」

という句がある。

「見たり聞いたりして一生懸命でお経を読んでいるのは小乗の世界である。仏法を



悟ってそれを解釈するのは中乗である。法に依って行いを修める、即ち法を行ずる行法の世界が大乗である」

という。だから、法を活かしているわけです。パウロが、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。」(ロマ8:2)

と言った「生命の御霊の法」、靈法です。靈法は罪と死との法より解放するばかりでなく、大いに力を与えて行わせる。だから、

「依法修行は大乗」

ということ。皆さんは、これで行かなければダメです。福音という靈法を体现する。

「福音体现は大乗」

というわけです。

白隠の言葉に面白い図みたいな字がある。

「動中工夫勝静中百千億倍」

動中の工夫は静中に勝ること百千億倍なりという。「動中の工夫」というのは、仏道を本当に体现して人を済度することをいう。何とかして人を救ってやろうと思つて大いに工夫する。我々で言えば伝道のことです。それは静中に勝ること、即ち、静かに坐禅を組んでいることに勝ること百千億倍である。ただ坐禅を組んでいるだけだったらダメだぞ、というわけです。これは無禅の禅なんです。これが本当の禅だという。

とにかく、本当に

「この一年をかけて一人を救つてやりましょう」

という、そういう「動中の工夫」をやつてください。それは静中に勝ること、ただ聖書を読んだり、ただ祈っていることに勝ること、百千億倍であるという。それがイザヤ書54章の気合です。

●終末的な恵福

9 このこと我にはノアの洪水のときのごとし。我むかしノアの洪水をふたたび地にあふれ流ることなからしめんと誓いしが、そのごとく我ふたび汝をいきどおらず、再びなんじを責めじとちかいたり。¹⁰ 山はうつり岡はうごくとも、わが仁慈^{いつくしみ}はなんじよりうつらず、平安をあたうるわが契約はうごくことなからんと。此はなんじを憐れみたもうエホバのみことばなり。

詩篇46篇です。天地が鳴りとどろこうとも、静かに深く神に寄り頼め、鎮まつておれという。日本はうろたえるなということ。日本は中国とソ連とアメリカの真ん中にいるのだから、イスラエルみたいだ。日本は列強のアッシリア、バビロニア、エジプトの中にいるイスラエルみたいなものだ。武器に頼るな、キリストに依れ。霊の力によつて愛を、力を持てと



いうことです。そして、どちらも本当に人として、善隣のよしみを結ぶことです。

「アッシリアとバビロニアとエジプトが神さまの民になるぞ」

と預言しているところが第一イザヤ書にある。それだけ桁違いな政治家がでてきたら凄い。結局は、人間ではない。それに臨んでくるところの神の事態です。

わが仁慈はなんじよりうつらず、平安をあたうるわが契約はうごくことなし。

とある。この「契約」はついにイエス・キリストにおいて新約という不動の契約が来た。

「昨日も今日も永遠に変わらざるなり」

というひとがやってきた。

そういうように、ありありと生き生きとキリストと交わらなかつたら、何の信仰ぞやという。どんな事があつても、どんな心配事があつても、一日の労苦は一日で足れりです。夜はキリストの中に、キリストの懷の中に——キリストは神さまの懷の中に入ったのだから——我々はキリストの懷の中に入つて、

「主さまー」

と言つて寝れば、すぐ眠つてしまう。これは本当です。睡眠不足は信仰衰弱です。

セントヘレナで最後に福音書にふれて、

「これは本ではなかつた、生きものであつた」

と言つた、あのナポレオンの告白は火のごときものです。

11 なんじ苦しみをうけ暴風^{はやち}にひるがえされ安慰^{なぐさめ}をえざるものよ、我うるわ

しき彩色^{いろどり}をなしてなんじの石^{いし}をすえ、青き玉をもてなんじの基^{もと}をおき、¹²く

れないの玉をもてなんじの櫓^{やぐら}をつくり、むさらきの玉をもてなんじの門をつ

くり、なんじの境内^{さかいのうち}はあまねく宝石にてつくるべし。

これにヨハネ黙示録21章が応えているわけです。エルサレムの石垣が宝石でできているように書いてある。もちろんそれは比喩的な表現です。

13 又なんじの子輩^{こち}はみなエホバに教えをうけ、なんじの子輩のやすきはだい

ならん。

「やすき」、平安のことがよく出てくる。そういう終末的な恵福^{さいわい}な祝福が与えられるという、凄い夢をここに展開しているわけです。

14 なんじ義をもて堅くたち、虐待^{しえたげ}よりとおざかりて憚^{おそ}ることなく、また恐懼^{おそれ}

よりとおざかるべし。そは恐懼^{おそれ}なんじに近づくことなければなり。

「恐懼^{おそれ}」という言葉もずいぶん旧約に出てくる。エゼキエル書にもエレミヤ記にもでてくる。

恐がるなという。それは強敵がたくさんいるから。

預言者の終末的な消息はみな、ヨハネが黙示録でもって再現し、更に本当に神の国の終末を描いているわけです。

15 縦^{たて}いかれら群れ集うとも我によるにあらず、凡てむれつどいて汝をせむる



者はなんじの故にたおるべし。¹⁶ みよ炭火をふきおこして用いべき器をいだす鉄工はわが創造するところ、又あらし滅ぼす者もわが創造するところなり。^{かなだくみ}
¹⁷ すべてなんじを攻めんとてつくられしうつわものは利あることなし。興起^{おこりた}
ちてなんじとあらそい訴うる舌はなんじに罪せらるべし。これエホバの僕等のうくる産業なり。是かれらが我よりうくる義なりとエホバのたまえり。
このような素晴らしい救われた栄光の事態はエホバから受ける義だという。義という言葉葉が非常に素晴らしい輝かしい意味でもって、ここでは言われているわけです。

● 靈魂をたのしめます

今度は、イザヤ書55章にいきます。55章は黙示録の21章、22章とあい応ずるようなところです。

「噫なんじら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。生命の「水」です。ヨハネ伝4章、出エジプト記17章、民数紀略20章、黙示録21、22章。これが霊を与えるところの生命の水のところですよ。

金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ(得よ)。

生命の水は金でなんか買えるようなものではない。「かい求めよ」と書いてあるが、「求めよ」でいい。「買え」という言葉は使つてあるけれども、この場合はなにも「買う」という意味ではない。金なくしては買えないんだから。

ヨハネ伝6章で、キリストが

「我を飲め、我を食らえ」

と言われた。キリストを飲み、かつ食らう。

「我は天からくだったパンである。わが血を飲め、わが肉を食らえ」

と具体的に言っているが、もちろん霊的な意味です。ところが、その言葉じりに躓いて、ユダヤ人が

「何だ、これは大変なことを言うやつだ」

と、およそ馬鹿げた問答がある。パレスチナのことを「乳と蜂蜜の流れる国」という表現もある。

² なにゆえ糧にもあらぬ者のために金をいだし、飽くことを得ざるもののため^{よきもの}に労するや。われに聴き従え、さらばなんじら美物をくらうをえ脂^{あぶら}をもてその靈魂^{たましひ}をたのしみますを得ん。

とは、「よきもの」即ちキリストという活ける生命の血を飲み、肉を食らい、魂は御霊を吸うわけです。みなこれは比喩的な表現です。



「観念ではダメだぞ、本当にあずかれ」

ということ。「よきものを賜らざらんや」というあの「よきもの」も聖霊のことです。「あぶら」ももちろん聖霊のことです。「膏注がれたる者」とは聖霊を注がれたる者のことです。ですから、55章のこの所の所はみな非常に霊的な消息を——まだ預言者ですから、「聖霊」とは言わなかったけれども——そのことに非常にくいついているわけです。

● 即在即所

3 耳をかたづけ我にきたりてきけ、汝等のたましひは活くべし。

「わが言は霊なり生命なり」だから、聴いただけでグーッとくるわけです。魂で聴く、身体で聴く。耳で聴くのではない。「からだ」とは全存在ということ。全存在で聴け、全存在で見ろということです。

「耳をかたづけ我にきたりてきけ」

という言い方はイザヤ書で14回でているそうです。申命記6章の「聴け、イスラエルよ」という、あの「聴け」もそうです。

「イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし。今日わが汝に命ずる是らの言は汝これをその心にあらしめ、勤めて汝の子等に教え家に坐する時も路を歩む時も寝る時も興る時もこれを語るべし。汝またこれを汝の手に結びて号となし、汝の目の間におきて誌となし、また汝の家の柱と汝の門に書き記すべし。」(申命記6:4-9)

とある。これはユダヤ人なら小さな子供でもみな言える言葉です。

われ亦なんじらととしえの契約をなしてダビデに約せし変らざる恵みをあたえん。

このダビデとの契約は、また預言者エレミヤがもつと高度なものにしたわけです。「平安の契約」(イザヤ54・10)とか「永遠の契約」とかいふ。

4 視よわれ彼をたててもろもろの民の証とし又もろもろの民の君となし命令する者となせり。

「視よ」という言い方は第二イザヤ書では28回出てくるそうです。

5 なんじは知らざる国民をまねかん。汝をしらざる国民はなんじのもとに走りきたらん。

今度は、もうひとつ次元が高いから、いろいろな国々にそれが伝わっていくという。

此はなんじの神エホバ、イスラエルの聖者のゆえによりてなり。エホバなんじを尊くしたまえり。

全世界の神だから、第二イザヤの言うことは世界的な消息になってきているわけです。



6 なんじら遇うことをうる間にエホバを尋ねよ。近くいたもう間によびとめよ。

こういう言葉もキリストは使つてらつしやる。即在、即所という。「遇うことをうる間に」とあるが、いつでも遇えるんです。「近くいたもう間に」とあるが、いつでも近くにいらつしやるんです。だから、待つことはない。即在、即所ということです。在る所が本当にその場所だという。私たちはどこにあるうとも、そこが天国です。天国を現する。

「尋ねよ、よびとめよ」は、キリストが、

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん」

と仰った、あの「求めよ、尋ねよ」です。私たちはいつも、現時点においてキリストを求め、キリストを尋ねる。そうすると必ず与えられる、必ず見いだす。必ず門は開かれる。

7 悪しきものはその途をすて、よこしまなる人はその思念をすててエホバに
かえ
反れ。さらば憐憫をほどこしたまわん。我等の神にかえれ豊かに赦しをあたえ給わん。

とにかく「帰れ、帰れ」とここでも言っている。「帰れ」と「行け」ということは同じことです。「帰り行け」ということ。これがやはり「進み行け」ということです。神さまはいつでも臨んでくる。来臨の神だから降^{くだ}つてくる。キリストは私の方に降つて来てくださる。こっちは「行く」です。これは相こたえている。降つてくる方が、本願の方が強い。本願の行動の方が強い。「こんなに私は近くににいるのに、お前は何をしているか」というわけです。

● 根元現実では成っている

8 エホバ宣^{のたまわ}給く、わが思いはなんじらの思いとことなり、わが道はなんじらのみちと異なれり。9 天の地よりたかきがごとく、わが道はなんじらの道よりも高く、わが思いはなんじらの思いよりもたかし。

これは楽しい言葉だ。

「私の思いは絶対次元だよ」

ということ。その絶対次元の言葉が極めて近く、一番簡単な言葉で表される。いと高きものは、いと低きところに現れる。

「至高^{いと}く至上^{いと}なる永遠にすめるもの聖者^{せいじや}となづくるもの如此^{かく}いい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ、謙^{へりく}だるものの霊をいかし、碎けたるものの心をいかす。」(イザヤ 57・15)

とある。絶対次元の神さまは絶対の低い所にやってきて、そして、極めて簡単な言葉で仰る。それを受けると、グーッと上げられる。だから、楽しい。

その「いと高き思い、道」が我々の歴史の中に、我々には隠れているけれども、必ずそ



れが成っている。根元（根源）現実では成っている。根元現実の世界を本当に受けとつていくと、そのいと高き絶対次元なことが、その現実が成っている。それが私たちの一番本当の現実になる。だから、

「御国を来たらせたまえ」

というのが、ここで成っている。

「天に成るごとく地にも成らせたまえ」

というキリストの祈りはここで成っている。それは何かというと、キリストを見ていると一番はつきりしている。

イエスは、黙示録21章、22章の現実を、彼が地上に在った2、3年でもつて地上で展開していた。こちらがゼロになっていると、いと高き御旨が成ってくる。いと高き絶対次元の思いや道は、こつちが無になつて、

「そんなものはこちら側には何もありません」

と言うと、それがやってくる。そして、ここに、あなたの方の中に知らないまに成っている。だから、無の世界は凄いと言っているんです。一切の真理が見えてくる…（異言）…。そういうもの凄い神さまの世界が私たちの中に成ってくる。

「キリストさま、ありがとうございます、私たちを無にしてください」

と、感謝の他はない。

●実言だから実現

10 天より雨くだり雪おちて復かえらず、地をうるおして物をはえしめ、萌を
いだししめて播くものに種をあたえ、食うものに糧をあたう。11 如此わが口

よりいづる言もむなくは我にかえらず、

全くそうです。神さまから、キリストから出る言葉は空しく返らない。私たちの中に花を咲かせ果を結ばせる。この素晴らしいキリストの霊言をそのままにしてたら、勿体なくてしょうがない。

わが喜ぶところを成し、わが命じ遣りし事をはたさん（必ず果たす）。

神さまのこの言葉がいかに実現していくか。神さまの言は実言だから実現するんです。

ゲエテが『ファウスト』の中で、

『初めに言あり』ではない。『初めに思いあり』でもない。『初めに力があった』は、大

分いいけれども、まだそれでもダメだ。『初めに行あり』だ

と書いた。神さまはイスラエルを救い出してから、それから律法を、言葉を与えた。初めに救い出すという行為があった。ゲエテは

「行為は一切である」

と言った。ゲエテという詩人がなぜ大きいかというと、「神・自然・我」が一如になつてい



る魂だからです。彼は太陽が大好きなんだ。

「太陽の前には無条件に頭を下げる。キリストの前にも私は無条件に頭を下げる」と、彼は死ぬ十日前に言った。

「体感(デフュール)は一切である」

とも言った。全存在で体感することが一切だと言った。さすがにゲエテだ。

「神さまのことを何と表現してもいい。本当にそれを体感しているかが問題だ」

と。彼は、

「我は神の中に生き動きまた在るなり」

という言葉が大好きだった。日本にはそういうような詩人がいない。漱石さんは

「則天去私」

と言ったけれども、彼は則天去私まで入っていない。

皆さんは大変な福音の中に今は入っているんだから、もう居ても立つてもいられないことになる。変質変貌してくださいよ。

「メタモルフオーゼ」(変質変貌)

という言葉もゲエテは好きだった。何でも、ものの本質をつかまえて、それが変質変貌して現れているんだという。花は葉から変わっていったと最初にゲエテが言った。それは、ものの本質を私心のない目で見ると、出てくるわけです。

「目が太陽の如くでなかったら見えるか」

とも彼は言った。

¹² なんじらは喜びて出できたり平穩にみちびかれゆくべし。山と岡とは声を
はなちて前^{みまえ}にうたい、野にある樹はみな手をうたん。

このような言葉は詩篇やホセア書の終りの方にもでてくる。

¹³ 松樹^{まつのき}はいばらにかわりてはえ、岡^{おのき}枯樹^{おどろ}は棘^{もみぢ}にかわりてはゆべし。此はエホ
バの^{ほまれ}頌美^{ほまれ}となり並^{また}とこしえの^{また}徴となりて絶^{たゆ}ることなからん。

自然と一緒にたて神を讃美する気持がここでも現れている。終末の美しい天国的な気持ちです。「とこしえの徴となり」とはいい言葉だ。ゲエテは、

「あらゆる過ぎ行くものは影像に過ぎない」

と言ったが、しかし、本当の意味で「徴」を彼はちゃんと見ている人でした。

とにかく、イザヤ書55章で最後は本当に美しい天国的なところに来た。

「我より出づる言は——神さまの言葉は——空しくは我に返らず。汝らの中にとどまるぞ。そして、活かすぞ。あらゆるものを現象していくぞ。体現せよ」

というわけです。



● 祈り

祈ります。ただ一人の方、主イエス・キリストさま。私たちは、

「預言者なるエホバの僕」

「贖罪者なるエホバの僕」

「活現者なるエホバの僕」

というこの三回の集会で、旧約聖書の最深のイザヤ書の一端を承り、あなたの御霊、御言をもつて全聖書を貫くところの真理を、あなたの預言によるところの消息を承り、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネにおいて体現されたところの驚くべきその現実を、その光をもつてこれを読みしめられ、黙示録にわたるところの大希望をここにまたかいま見させられ、感謝いたします。

聖書はただ一つの本です。私たちは生涯を貫いてこの聖書を食らい、自分自身が活ける書とせられ、キリストの霊の書とせられ、進んで行きたく存じております。兄弟姉妹たちが東西南北から、この世のことを振り切つてやって来しました。あなたが深く豊かに祝福してください、恵みを与えてください、感謝いたします。私たちの全存在の中にくいこみましました。それが芽をふき花を咲かせ果を実らせられることを信じて御名を讃え奉ります。それぞれの所に帰つていきますが、またそれぞれの環境また業においてあなたのご栄光が地道に現れてくださるように、私たちをお捕らえくださらんことを願ひ奉ります。

○兄弟を先頭にして、この秋の幕屋を張ってください、このような集会をもたされた京都召団の兄弟姉妹たちの愛に感謝いたします。私たち召団は本来に一つのはらからとして、さきほどイザヤ書にもありましたように、幕屋の幕を張り広げ——それはあなたがなさいます——また、杭を打ち返し、また愛の綱を延ばして、どうぞ、あなたのご栄光が現れますように、私たちを十全にお使いくださらんことを願ひ奉ります。

いたりませんが、僕の『エン・クリスト』誌第12号を祈りをもつて召団の人たちが分けて、そして、この新しき喜びの中に福音を知らざる人たちが入りますように、どうぞ、私たちを自由にお使いくださらんことを切に願ひ奉ります。

あなたの栄光の現れんため、あなたのみ光が、おん生命が、愛が注がれんがため、それだけであります。お願いいたします。感謝いたします。どうぞ、すべてのこの兄弟姉妹たちの主に在るところの愛といういろいろなお助けに感謝いたし、この兄弟姉妹たちが、来たるべきクリスマスをお祝いするクリスマスでなく、各召団においてあなたを本当に迎えるクリスマスとして迎えることができますように、お祝福くださらんことを切に願ひ奉ります。また来たるべき来年に対するところの大希望をもつて進んでいきます。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美と希望を兄弟姉妹たちの全身にあふれるそれと共に、キリスト・イエスの御名により捧げ奉る。アーメン。

